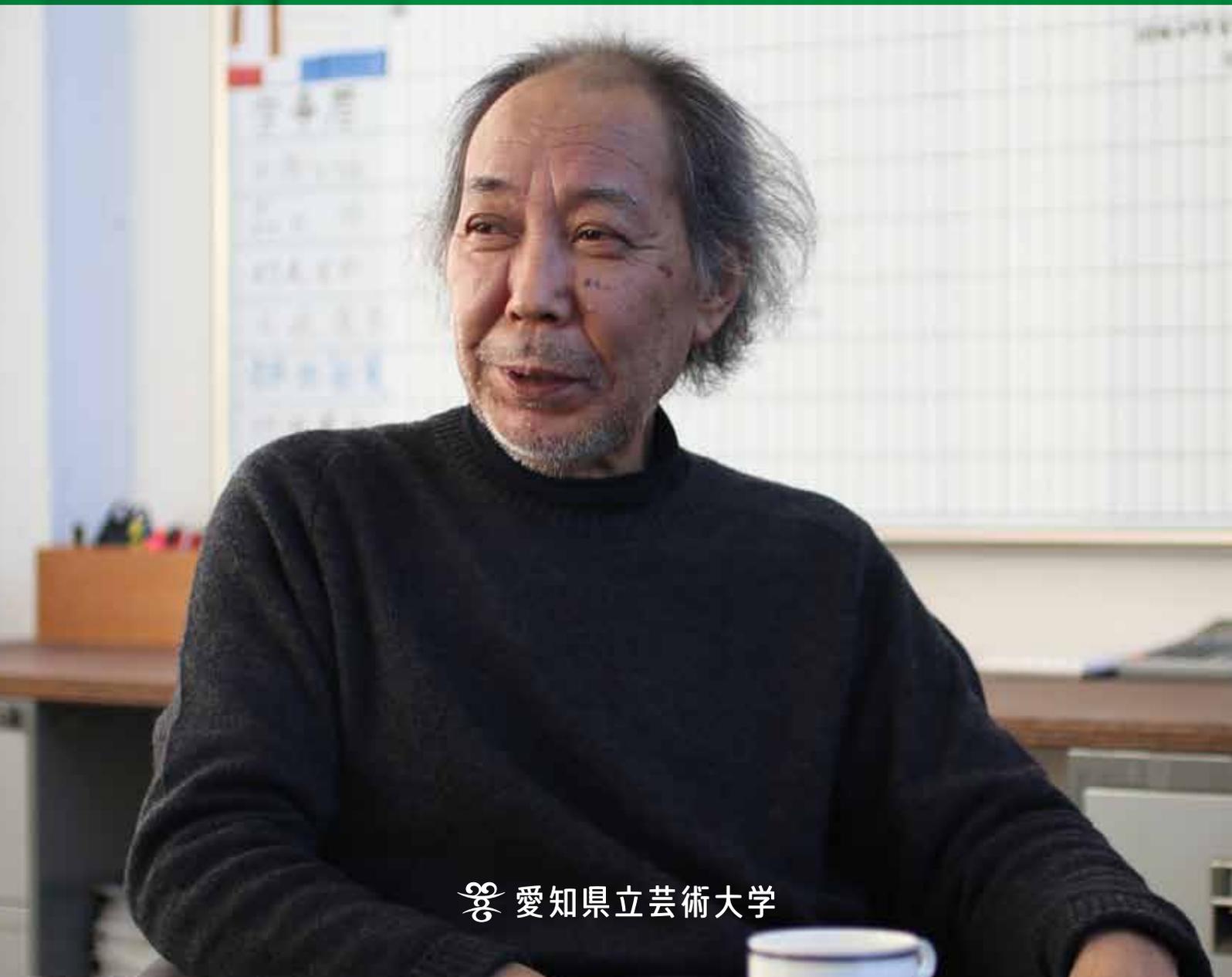


注目のトピックス
創立50周年記念展示等
出品アーティストインタビュー
戸谷成雄





愛知県立芸術大学学長
松村公嗣
まつむらこうじ

学 長に就任して2年目の今年度は、慌ただしく過ぎていきました。まず、4月には、創作と修復の

両輪が備わる理想的な芸術大学を目指して準備してきた、念願の文化財保存修復研究所が設立しました。開設直後から、新聞に取り上げられたこともあり、掛軸や屏風の修理等多数のお問合せをいただき、研究所として順調なスタートを切る事ができました。

また、平成28年(2016年)に創立50周年を迎える本学では、創立記念の年に実施する記念事業のための準備を着々と進めております。10月には記念事業推進のための寄附金募集を始めましたが、徐々に、協力をいただいております。誠に感謝しております。今後も、記念事業をより良いものとするため、積極的に寄附金募集活動を行ってまいります。

12月には、毎年恒例のオペラ公演があり、年々充実していく様子を実感しております。本学のオペラ公演は、音楽学部の学生が主体となって参加するだけでなく、美術学部が舞台美術を担当しており、音楽的にも視覚的にも本学の魅力を存分に楽しむことのできる舞台となっております。今後も、両学部の教員と学生の研究成果を披露できる貴重な機会として、この公演を継続していき

たいと思っております。

本学はグローバル化を目指し国際的な広がりに向けて急速に変化しつつあります。大変素晴らしい事ではあります。しかしながら日本における長い歴史の中で、我々自身が日本の文化芸術を理解し、国粹主義に偏らず、又国際的な迎合もせず、考えに自信を持って肅々と押し進めることも大切であります。文化のグローバル化は伝統文化に裏打ちされた日本の文化であるとの認識があつてこそ真の国際化と言えるのではないのでしょうか。創立50周年という節目の年を迎えようとしている今、改めてこの地域に根差す芸術大学の基盤を再確認する必要があります。と思ひます。

また、本学は恵まれた自然と共棲する素晴らしい環境にあります。この環境を維持しながら、より安全安心な大学にするため、本学の特徴あるキャンパス群を生かした耐震工事を行うべく、今年度設計等の準備をいたしました。来年度からは、いよいよ工事が開始されます。

音楽・美術それぞれの分野で、本学の学生たちが日々新しい芸術表現に挑戦し、成長していけるよう、来年度も更なる充実した取り組みを行っていく所存です。

2016年(平成28年)、 愛知県立芸術大学は 創立50周年を迎えます。



創立50周年記念事業のご案内

本学は、創造と保存、この両輪が備わる理想的な芸術大学を目指し、新たな取り組みに挑戦し、大学の価値向上に努めているところであり、それらの集大成として創立50周年記念事業「直指天芸術は森からはじまる」を計画いたしました。

戸谷 成雄（とや・しげお）
彫刻家
愛知県立芸術大学彫刻専攻卒業。同大学院美術研究科彫刻専攻（現博士前期課程彫刻領域）修了。
愛知県美術館、広島市現代美術館、シューゴ・アーツ、ケンジ・タキ・ギャラリーなどで個展多数。2004年度芸術選奨文部科学大臣賞。パブリックコレクションに、ノイエギャラリー・アーヘン（ドイツ）、東京国立近代美術館、東京都現代美術館など。現在、武蔵野美術大学教授。



戸谷 初めて発表したのは、1971年です。2年生のときの課題作品を見た彫刻家の山本豊市さんに「お前はもう卒業でいいから展覧会出せ」と言われたのです。「分かりました」と出したのが3年生になった1971年4月、国画会という公募団体の展覧会でした。

関口 当時の戸谷さんは、何を考えていらしたのでしょうか。

戸谷 美術というのは自分で考えるより、何らかの影響を受けるもの、と思います。そのころの私は、李禹煥の本を読み、彼の考え方を知り、「このまま美術をやつていけないのでは」と迷いが生まれました。そこでたまたま見たのが、1970年に東京都美術館でしていた「人間と物質」という展覧会です。

関口 たまたま、観になったのですか。

戸谷 はい、2年生のとき、国画会の搬出のお手伝いで上野に行ったときに偶然見たのですが、「こういうのもあるんだ」と頭を離れなくて。学部ころの私は具象彫刻をつくっていたのです。国画会でいくつか賞をもらって、卒業制作の作品で国画会会友にもなりました。しかし大学院に入ってから、私の意識が現代美術の方向に移っていったのです。

関口 そのころ竹やぶをつかった作品がありますね。

戸谷 大学院2年生だった1974年に、東京のときわ画廊で「ボンベイ79」という個展を開いたり、翌1975年に竹やぶでパフォーマンスをしています。

関口 当時の作品を見ると、既に「内」と「外」というイメージや構成があつて、現在の戸谷さんの作品につながりますよね。

戸谷 ええ、その通りです。作品の形はそれぞれ時代で変わってきていますが、根っこは基本になつて、それを繰り返しながら展開しているのです。学生たちにも「感受性が、番強い20代半ばくらいに考えたことは、生つて回る」と話

をしているほど。私自身、学生のときにした行爲が、あとになって大きな意味を持つてくるし、廊下にはつぼり出したり、卒業するとき捨ててしまったような実験的な作品が、あとあとになって成長することに気付かされています。

森という視点

関口 愛知県立芸術大学は、全国でも珍しい自然豊かな環境の中にある学校です。戸谷さんも「森」のシリーズをはじめとした作品と、一般的な「森」のイメージに、重なる部分はありませんか。

戸谷 大学の裏山に行くと、山があつて、谷があつて、山があつてとデコボコしながら瀬戸の方につながっています。この山と谷の「構造」と、その森の中で生きていく「人間の視線」は、パレルな関係を持つているふうに感じます。例えば中国の北宋絵画を見ても、そう感じます。郭熙や范寛という人たちが描く輪郭のつくり方や空気感といったものと、その輪郭の外に点がはみ出しているというものは、絵画の中にある外側と内側の関係性を表し、「構造」と「人間の視線」を表現していると思います。また源氏物語絵巻にある、流れるようなひらがなのうねり。書かれてある文字がひっくりかえったりしながら次の文字につながる雰囲気にも、私は「構造」と「人間の視線」を感じます。

関口 戸谷さんは森を見ながら、その「構造」と「人間の視線」を見せるような作品をつくられているのですか。

戸谷 いま、埼玉県秩父に私のアトリエがあります。秩父は広葉樹、落葉樹がたくさんあるエリアで、たまに林の中を歩いています。ひとつの輪郭として、固い地面を踏んでいる、と想像してください。少し見上げると、周りの木のくねつていく幹、いろんな方向に向いている枝が、織物のように見えるし、感じられるのです。織物の外側にある大気や光、風とか水分といったものが、内側

愛知県立芸術大学の卒業生であり、創立50周年メイン記念事業の二つである「生えている草1本でさえも」「なぜ緑色なのだろう?」ということに気付かせてくれる

創立50周年記念展示等出品アーティストインタビュー

戸谷成雄

愛知県立芸術大学の卒業生であり、創立50周年メイン記念事業の二つである「記念展示等」芸術は森からはじまる」への出品が決まっている戸谷成雄氏。県芸での思い出や、自身の作品と県芸との繋がりなど、記念事業に向けての想いを聞いた。

おおらかな学風に魅かれて

関口 創立50周年記念展示等「芸術は森からはじまる」に出品される戸谷成雄さんにお話を伺います。戸谷さんは学部の卒業が73年、修了が75年、という本学4期の卒業生です。まず、愛知県立芸術大学にいらして、印象的だったことはありますか。

戸谷 私は入学試験で初めて愛知県立芸術大学に来ました。そのとき「すくおおらかな学校だなあ」と感じました。

関口 それはなぜでしょうか？

戸谷 試験で、粘土制作の課題テーマが「牛」で、近くの鉄工所の吹き抜けのところに、牛が何頭かいたんです。

関口 すくいですか。

戸谷 牛を見ていたら、おしっこはするし、うんちもするし。先生の人数が少なくなくて、試験監督を



に入ったり、外側で反射してはじき返したり、伝わりながら地面に浸透したり……。私はそのようすを作品化したいと思つたこともあり、

関口 面白いですね。でも戸谷さんは作品で木をとらえるとき、サイズを大きくするとか、重量感を出すというようなり方ではない、ということが特徴的に感じます。

戸谷 私の作品を見た人によく「森ですね」と言われますが、植林した木を作品にしているわけではありません。木を垂直に立てていますが、木や森を表現するというより、作品からは東京やニューヨークに垂直に並ぶビルのようなものを想像しています。もしビルが廃墟になったら、僕らの作品に近い感じになつていくはずですから。

いまの県芸生に伝えたいこと

関口 いまの愛知県立芸術大学の学生に、何かメッセージがありますか。

している学生たちは、コンロでスルメを焼いて食べたりして。「私にはこの雰囲気があっている」と進学を決めました。

関口 そのころの彫刻科は何人いたのでしょうか。

戸谷 10人です。学生運動があつたり、いろんなことがあつて、結局卒業するときには、8人くらいになっていました。学校周辺は道路が舗装されてなかったり、この丘陵地も今のようには木が深く生えていませんでした。校舎もまだ全部建てていなくて、音楽堂もなかったはず。彫刻科の作業をする工場をつくる手伝いもしました。

大学院入学から切り替わった方向性

関口 発表を始めたのはいつくらいからですか？

戸谷 私が若いころは、展覧会の情報も限られていて、東京や世界で起つていっていることを想像したり、多少の時差があつて遅れて入つてくるような時代でした。いまはインターネット社会なので、世界中どこからでも情報を自由に取ることができると、みんな同時に見ていると思います。だから愛知県立芸術大学だから特別、ということにはなつていないはずで、誰もが詳しく情報を持っていますよね。

関口 逆におつとりしているの、心配になつてしまつてありますか。

戸谷 いずれそうも言つていられない状況がやってきましたよ。学生のうちは、むしろのんびりしている環境で、情報を「閉じる」と「開く」との落差を身体的に感じることもできる場所が大事である、という気がします。

関口 どういうことでしょうか、具体的に教えてください。

戸谷 情報は「たくさんあればいい」というものではなくて、「ものを考えるきっかけ」なのです。小さなものを今まで見た目は違う、別の視点でそのものを見直すことができる訓練を持つていなくても、自分で小さなところから何かヒントを見つけ出して、それを展開させて発展させることができます。愛知県立芸術大学の環境は、生えている草1本でさえも「なぜ緑色なのだろう?」ということに気付かせてくれるし、そういった発想から何か生まれてくる、と私は思うからです。

関口 分かりました。いろいろな気を付けながら、我々教員もやつていきたいですね。今日は長い時間、ありがとうございます。

取材日：平成26年11月19日（水）
インタビュアー：関口敦仁（デザイン専攻教授）

学部三年の頃、大学でオペラの授業が始まると、正直恥ずかしくて、逃げ出しかけて仕方なかった。その最たるものは、モーツァルトの《コジファン・トゥッテ》の二三番、ドラベツラとクリエモの二重唱であらう。ドラベツラの胸に触れながら「このトキメキは何？」などと人前で歌うこの恥ずかしさと言ったら…。相手役の子との練習の時、練習室の扉を紙で塞いで、「お願いします！」と気合を入れてからやっとの思いで胸を触って…。とまあ、今思い出すだけで顔から火が出そうだ。

大学院修了後は、オペラの仕事もやっただけ、コンサートの仕事に比重を置いていた。そんな自分がオペラで面白いかも、と心から感じる事が出来たのは、二〇〇二年の新日フィル定期《ナクソス島のアリアドネ》のルレキン役。この出演経験が自分を、留学して更に勉強したいという気持ちにさせ、文化庁派遣芸術家在外研修員としてドイツで勉強することを許された。

演ずることには、つたな、と思っただけ、留学二年目の時の大学公演《コジファン・トゥッテ》。頂いた役である、ドン・アルフォンゾは「クリエモやフェランドより年上の、哲学を勉強する学生」という設定。このアルフォンゾは第二幕の二三番の二重唱、二九番のフェランドとフィオルディ



音楽学部声楽専攻准教授
初鹿野剛
はつかの、たけし

「恥ずかしさ」を捨てる

リージの二重唱を影からビデオカメラで撮影し、終幕でその模様を舞台中央のスクリーンで放映する、という演出。撮影の登場時に陰湿な感じだの、いろんなティーストを混ぜ込んで演じてたら、だんだんぐちゃぐちゃという次第。あれ以来、百十キロ超の暑苦しい(?)体を駆使し、キャラクターの強いのを演らせて貰う機会に恵まれた。

特に新国立劇場での《ラ・ボエム》アルチンドロ役(二〇〇八年)や、《ムツェンスク郡のマクベス夫人》警察署長役(二〇〇九年)は思い出深い。新国立劇場は、海外の著名な指揮者演出家歌手、内外で活躍する日本人歌手が参加、国際的な水準その内容を廉価で楽しめる「シヨナルシアター」。その劇場に呼んで頂き、参加した前述の二公演も、素晴らしい指揮、演出、共演者、スタッフの皆さんに恵まれ、毎回満員のお客様の前で心地良い緊張感の中で歌うことが出来、本当に楽しかった。

また、東京二期会、兵庫県立芸術文化センター、日生劇場その他各地での舞台も自分にとって実に充実したものとなった。

そして、今年の四月から愛知芸大で、若い学生たちとともにオペラをやっている。これまでの経験を少しでもこの地で生かすことが出来たら、と考えている。



- 冒頭写真：ヘンデル《メサイア》独唱 (写真提供：桜美林大学)
1. ブッチーニ《ラ・ボエム》アルチンドロ役 (撮影：三枝近志、写真提供：新国立劇場)
 2. ショスタコーヴィチ《ムツェンスク郡のマクベス夫人》警察署長役 (撮影：三枝近志、提供：新国立劇場)
 3. ショスタコーヴィチ《ムツェンスク郡のマクベス夫人》警察署長役 (撮影：三枝近志、提供：新国立劇場)
 4. 本学芸術祭 2014「Teatro alla Montagna」によるモーツァルト《コジ・ファン・トゥッテ》ドン・アルフォンゾ役 (撮影：小川陽久)
 5. 声楽専攻開設授業「オペラ研究」夏季練習集合写真 (撮影：小川陽久)

創立50周年記念事業の概要

一直指天 芸術は森からはじまる

創立以来、丘陵地の自然豊かな森に囲まれて美術・音楽の才能ある芸術家たちが育っていききました。講義棟に刻まれた直指天の志をもって、これからも未来に向かってまいります。

創立50周年記念式典

2016年5月24日(火)
於:愛知県芸術劇場 コンサートホール
第1部: 記念式典・映像インスタレーション
第2部: 創立50周年記念祝祭管弦楽団 演奏会
・国内外の第一線で活躍する本学卒業生・本学教授陣で編成される、一夜限りのドリームオーケストラ

創立50周年記念オペラ公演

2016年9月25日(日)
於:愛知県芸術劇場 大ホール
演 目: G.ブッチーニ「ラ・ボエム」
出 演: 本学声楽専攻卒業生・在校生・教員 他
管弦楽: 本学管弦楽団・弦楽器コース・管打楽器コース
舞台美術: 美術学部プロジェクトチーム



- ◆芸術資料館・サテライトギャラリー・豊田市藤沢アートハウスの企画展示
- ◆各種コンサート・講座の開催
芸大オペラ、音楽学部定期演奏会、管弦楽団定期演奏会、弦楽合奏定期演奏会、ウインド・オーケストラ定期演奏会 他
- ◆卒業演奏会／卒業・修了制作展
- ◆あいちトリエンナーレ・瀬戸内国際芸術祭への参画

「愛芸50基金」のお願い

- I. 募金の目的
愛知県立芸術大学創立50周年記念事業の推進。
(記念事業の記録編纂、広報、及び募金活動、顕彰等にかかる経費を含みます。)
- II. 募金のご案内
目標金額 1億円
募集期間 平成26年10月1日～平成29年3月31日
受入口数 個人の方:1口 5千円、できれば2口以上のご協力を御願いたします。
法人の方:1口の金額は特に定めておりません。
- III. お手続き方法
1.お申込み
創立50周年記念公式ホームページよりお申込みいただくか、愛芸50基金事務局へ申込用紙をご請求の上、郵送又はFAXにてお申し込みください。
2.振込先のご案内
お申込みをいただいた後、送付させていただく「お振込のご案内」などにより、お振込を御願いたします。
3.領収書の送付
ご入金の確認ができ次第、領収書とお礼状をお送りいたします。
(寄附金の領収書は確定申告の際に必要となりますので、

- 大切に保管してください。)
- IV. 税制上の優遇措置
ご寄附いただいた寄附金については、税制上の優遇措置が受けられます。
◇個人からのご寄附の場合
・寄附金総額の2千円を超えた額が、その年の課税所得から控除されます。(年間所得の40%まで)
・控除手続きは、確定申告で行っていただけます。寄附金の領収書を、寄附金控除の証明書としてご利用ください。
◇法人からのご寄附の場合
・寄附金の全額を当該決算期の損金に算入することができます。
 - V. ご厚志への謝意
ご寄附いただきました皆様には、末永く本学の歴史に刻まさせていただきます。感謝の意を込めまして以下のことを行わせていただきます。
◇ご芳名の掲載:寄附者のご芳名を本学ホームページ等に掲載させていただきます。
◇寄附者の顕彰:一定額以上(募集期間中の累計で、個人10万円以上、法人30万円以上)のご寄附をいただいた方に、感謝状贈呈及びご芳名の銘板を学内に掲示さ

- せていただけます。
◇大学情報のご案内:本学の広報誌の送付、及び各種の行事・イベントのご案内をさせていただきます。
VI. 個人情報について
寄附金申込みの際にご提供いただいた個人情報は、寄附申込者の管理と礼状・領収書・各種案内等の送付のみに利用し、ご本人の同意を得ずに、個人情報を第三者に提供することはありません。
VII. その他
募金の進捗状況、支出事業とその金額については、本学ホームページ上で定期的に報告いたします。

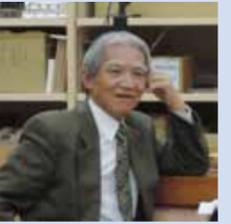
【連絡先(送付先)】
愛知県立芸術大学 芸大総務課
愛芸50基金事務局
〒480-1194 愛知県長久手市岩作三ヶ峯1-114
Tel : 0561-76-2492 Fax : 0561-62-2720
Mail : aigeiweb@mail.aichi-fam-u.ac.jp
URL : http://aigei50th.aichi-fam-u.ac.jp/

創立50周年記念展示等「芸術は森からはじまる」

- 2016年9月3日(土)～9月24日(土)
於:愛知県立芸術大学キャンパス
芸術資料館展示／環境インスタレーション
／サウンドイベント／映像インスタレーション
／法隆寺金堂壁画模写展示館ツアー 他
- 関連企画:
■「森・芸術・都市」国際シンポジウム 於:本学キャンパス(奏楽堂・新講義棟)
9月17日(土)～19日(月)
■「異文化へのまなざし」国際シンポジウムとレクチャーコンサート
於:本学キャンパス(室内楽ホール 他) 9月下旬
●日本画企画展示「日本画200」 於:名都美術館 7月/日本画アトリエ 8月～9月
●油画企画展示「INTERWOVEN-編み込まれた世代-」
於:市民ギャラリー矢田 9月9日(金)～9月24日(土)
●彫刻企画展示「Blue birds-森の向こう」 於:彫刻アトリエ 8月～9月
●陶磁企画展示 於:瀬戸市美術館 7～8月
●美術館連携企画「エミール・ガレと森の生態系」
於:ヤマザキマザック美術館 9～11月



直指天(じきしてん)
禅語の「直指人心」に由来し、周囲を緑に囲まれたキャンパス内で、常に高みを目指すことを忘れずに芸術活動に取り組んでほしい、という願いを込めて、初代学長上野直昭が残した言葉。



日本画専攻客員教授
有賀 祥隆 ありがよしただか

私は生来、絵を見るのが好きであつたが、このことが今迄の自分の生き方を決めてきたようにも思われます。大学で美術史を学び、卒業後は文化財保護委員会事務局美術学芸課(現文化庁文化財部美術学芸課)に奉職し、絵画部門で国宝重要文化財の指定調査や絵画の修理監督を務め、そのあと奈良国立博物館へ配置換えとなり、絵画の展示などに携わり、中でも特別展「平安仏画」を企画展示できたことは大きな仕事でした。暫くして文化庁に戻り、間もなく



美術学専攻客員教授
伊藤 由美 いとう ゆみ

美術学という分野に任を仰せつかった私のベースは洋画の修復技術者です。20年以上浸かった修復三昧の世界から、神奈川県立近代美術館に職場を移してからは、保存修復担当研究員として美術館の保存に関わる様々な仕事に携わることになり、現在も非常勤で続行中です。作品の調査・修復・展示と保存環境の整備・安全対策等が中心ですが、災害時のレスキュー活動も含め、これらの仕事は作品を後世に良い状態で残し、多くの人が



美術学専攻講師
本田 光子 ほんだ みつこ

美術学専攻で日本美術史を担当しております。研究分野は中近世絵画史で、とりわけ江戸時代に活躍した俵屋宗達について調べています。東京藝術大学で博士号を取得後、東京国立博物館学芸研究部の任期付研究員を経て着任しました。自身の専門分野のみならず、博物館学課程や博士後期課程など多方面にわたる教育活動に、これまでの経験を活かして尽力しています。「学生第二」の教職員の皆様方と、真摯で純真な学生たちに恵まれ、大学として最高の環境に感謝しております。教員1年目は、芸大らしいより良い教育を求めて試行錯誤を繰り返しながら、毎日が無我夢中でした。どんな分野の学生にとっても掘りどろとなり得る日本美術史の豊かさ、面白さを伝えたい。学生の持っている力を引き出したい。そんな思いで頭がいっぱいです。いまだ足りない点も多くありますが、学生たちとともに日々学び成長してまいります。何卒よろしくお願ひ申し上げます。



デザイン専攻准教授
夏目 知道 なつめ ともみち

2014年度より美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻環境デザイン領域准教授に着任いたしました夏目知道と申します。略歴を、案内いたします。1989年愛知県立芸術大学美術学部デザイン専攻卒業(20期)

住宅具・小物などインテリアデザインを中心に「暮らしと空間に関わるさまざまなこと」をデザインする活動をして参りました。環境デザイン、特に商環境デザインの専門性をもつて



陶磁専攻客員教授
小松 誠 こまつ まこと

1973年スウェーデンでの3年間のデザイン修業から帰国して、間もなく仲間とデザイングループを結成した。自分たちでデザインして、製造も販売もしているというものだった。その最初のデザインが磁器の灰皿である。当時かなりのヘビース

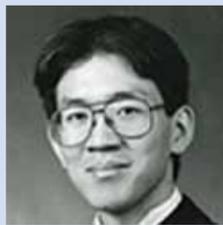
フデザインです。その後もニューヨーク近代美術館のコレクションになった、ジワのシリーズをはじめ多くの製品のデザイナーとして今日まで、関わりは長年に至っております。このように愛知県との繋がりは深く、当大学での非常勤講師も長くやらせてもらいました。此の度、名誉な事に客員教授として招かれて光栄です。この喜びをもって、物作りの楽しさを学生と共に実践していきたいと思っております。



音楽専攻准教授
初鹿野 剛 はつかの たけし

本年四月に音楽学部音楽専攻教員として着任しました。声種はバリトンです。音楽家団体「二期会」に所属し、これまで国立劇場、日生劇場、東京二期会等をはじめとするオペラの現場で、またコンサートの現場で様々な作品を演奏する機会に恵まれました。本番の演奏はお客様、

なつていく学生の姿、大学オペラで必死に歌い演じる学生の姿、校舎ロビーで学生たちと話をする事等々、これまでとは違う刺激に満たされ充実した日々を送っています。自分の演奏はもちろん、学生への指導、大学運営にたずさわられること、大変光栄に思っています。どうぞ宜しくお願いします。



器楽専攻ピアノ准教授
中尾 純 なかお じゅん

第一級の芸術家たる同僚の素晴らしい活躍に日々刺激を受けるとともに、学びの楽しさを知る意欲的な学生たちとの出会いを何よりも喜ばしく思っております。不器用で華やかさも無縁の少年でしたが、良き師に導かれ芸高、芸大へと進み、大学院修了後はドイツ、

のできるレッスン室をつくってしまいたほど、教育熱心という自負がありますが、自身の演奏はやはり心のすみかというべきもの。できる限り時間を確保したいと考えております。



器楽専攻(管打楽器)准教授
倉田 寛 くらた ひろし

学生時代にブッチーニ作曲歌劇「ラ・ボエーム」を経験し舞台芸術に衝撃を受け、大学卒業後に入団したオーケストラでの初仕事もボエームでした。オペラを経験する度、美術と音楽の融合の素晴らしさを常に感じています。

そして2年後の平成28年には創立50周年記念オペラもボエームではないか……！偶然とは思えないくらいに何かに引き寄せられ、本学に着任した気がします。オペラの中で、私の専門である楽器(トロンボーン)の役割は決して大きいとは言えませんが、様々な分野を知り、アンテナを張り、大作の一部になり得る満足感を学生には経験して貰いたいと思っています。



教養教育等准教授
井上 彩 いのうえ あや

教養教育の英語と言語学を担当しております井上彩です。自然に恵まれた美しいキャンパスで少人数教育を実践する、という現代日本の大学教育においてはとても贅沢な環境で教育研究活動に携わることができて感謝しております。研究の専門はビジョン・クレオール言語学という言語学の中でも珍しい分野です。特に米国ハワイ州で話されている「ピジン」と呼ばれる英語系のクレオール言語を現地での

フィールドワークを通して研究しています。人が世界中を移動することによって生ずる言語の接触によって、言語そのものに起こるダイナミックな現象を解き明かすことが研究テーマです。学生には語学の学習や言語学の授業を通じて、言葉によるコミュニケーションの重要性、また言葉というメディアが人間の社会的実践に果たす役割について再認識してほしいと願っています。また、私自身も大学や学生からたくさんのごことを学び、刺激を受けることをとても楽しみにしています。

愛知県には約4600軒もの寺院があり、これは京都や奈良よりも多く、全国の数を擁しています。こうしたお寺には、古くから伝わる絵画や仏像などが所蔵され、今なお尊崇の対象になつてい

文化財保存修復研究所ができました

る方、傷んで修理されないまま放置されたものもあります。また個人によつて蒐集された美術作品においても、十分な管理が行き届かないまま傷んでしまったものもあるでしょう。

平成26年4月に設立された愛知県立芸術大学の文化財保存修復研究所は、こうした中部地方の文化財を守るために運営を開始しました。これまでこの地域には、このような美術品の保存修復を専門とする教育機関や研究機関がありませんでした。



部門からスタートし、専門の技術者による指導のもと、絵画文化財(屏風や掛軸など)の保存修復事業及び模写事業を進めています。この事業は大学院教育に取り入れられ、本学の大学院生(日本画専攻課程)が参加し、学生にとって貴重な実習機会になっています。本研究科設立の目的は、中部圏の貴重な文化財を後世に伝えていくことですが、将来的に保存修復技術者や研究者として活躍できる人材を育成することも、大切な役割のひとつです。

4月の設立以降現在(11月末)までに、事業受託件数4件(作品数7点)を抱え、10月には研究所設立のお披露目を兼ねて「模写と文化財修理」と題した芸術講座を開催しました。まだまだ認知度の低い研究所ではありますが、今後も少しずつ



しずの周知活動を進めていきます。また、この中部地方は何十年も前から東海・東南海地震が予測されています。近隣の文化財関係機関や施設と協力関係を築き、有事の際の体制を整えておきたいと考えています。

来年度には作品の保管庫や調査室を備えた修復作業専用の施設建設が予定されています。修復模写の対象も日本画のみならず、油彩や仏像などに拡大し、各専攻と共に芸術大学ならではの協力的体制をとりながら、運営していくことを目指しています。

五芸祭は、国公立系芸術大学5校の学生による、年に一度の芸術文化とスポーツの祭典です。展覧会演奏会講演会競技大会において五校の学生が交流します。その歴史は京都市立芸術大学と金沢美術工芸大学の野球部間の交流に端を発し、後から東京藝術大学や本校、沖縄県立芸術大学が加わります。平成26年度の五芸祭は、第60回目となり、本校愛知県立芸術大学が開催校を担いました。「愛de.ear」というテーマの下、4校の芸大生が本校に集まりました。



私は実行委員長として、今回の五芸祭に関わらせていただきました。各企画を照らし合わせたり、各大学の委員長と連絡を取ったりしました。そして当日たくさんの方々に支えていただいた、無事に4日間を終えることができました。「愛de.ear展」「うい展」といった展覧会では、各大学の学部生から多数の応募をいただき、作品数が充実した展覧会となりました。競技大会では、委員が緊急時のマニアルを作成することで、各部活動が不自由なく盛り上がるよ



うに運営しました。未経験だった実行委員長という立場に立つて思ったことは、企画運営が想像以上に大変だったこと、自分とはとても大きなイベントを運営しているんだという実感でした。私にとって色々なことが初めてで、思い通りに物事が進まず、焦ったり悩んだりすることが少なくありませんでした。けれども、これまで大きなイベントを運営した経験や各大学に知人ができたことは何よりの強みだと思っています。また、五芸祭を通して大学内で友人ができたことも、五芸祭になった利点でもあります。

最後に、五校の芸大生が集結する五芸祭は、60年間脈々と続いてきた伝統であり、各大学の芸大生同士が文化交流するという点において大変貴重なイベントであります。私は今後五芸祭がより活気づくことやその発展を期待しています。(美術学部 福地由佳)

近年国際化推進を掲げ、多様な事業を展開している本学では、次のような活動を実施しました。

国際交流事業の活動報告

■「国際交流室」の設置
海外渡航や留学を目指す学生のために「国際交流室」を設置。現在多くの学生が利用しています。今後も活動を拡充し、学生が新しい挑戦に取り組めるようサポートをしていく予定です。

■留学生派遣と受入れ
本学では、継続的に海外協定校との学生交流を行っています。今年度は2名の留学生を派遣しました。(ケルン音楽大学及びリスト音楽院(ハンガリー))また、海外協定校から2名の学生を受入れました。(チェンマイ大学及び台南芸術大学)今後も協定校との学生交換を積極的に進めていきます。



〈上〉「弦楽器コース教員とケルン音楽大学教員との合同コンサート」の様子
〈右下〉チェンマイ大学(タイ)の留学報告会
〈左下〉国際交流室

■「日タイアーティスト交流展」
本学教員と学生が協定校のアーティスト(タイ)より招聘を受け、共同展覧会に参加。展覧会の実施ほか、様々な内容が盛り込まれました。

■「キュービクミュージアム・小さな木製ボックス内に様々な表現をする作品群の展覧会を行う本プロジェクトを協定校シラパコーン大学(タイ)で実施。現地での展覧会に本学教員学生も参加し、新しい試みに挑戦しました。

■カリフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)との交流
継続的に交流しているカリフォルニア大学サンディエゴ校(本学作曲専攻教員が訪問。本学教員の作品をUCSDの学生が演奏をする等の交流を実施。UCSDとは今後も多様な交流の可能性を期待できそうです。

上記以外にも様々な事業を実施し、国際交流事業の充実を図りました。今後も、層の充実を目指して進めていきます。

愛知県立芸術大学芸術創造センターが継続的に行っている「アーティスト・イン・レジデンス」事業において、今年度は美術分野1件2名、音楽分野3件4名をお招きしました。

アーティスト・イン・レジデンス2014

6月・ウィオラ奏者のマイアス・ブッフホルツ教授(ケルン音楽大学)
協定校ケルン音楽大学より「ケルンの風IV」と題してお招きしました。(ブッフホルツ教授には、前年度に本学の留學生のご指導いただきました)学生との演奏会はほぼ満席の盛況ぶり、教員によるコンサートは大変充実した内容の濃いコンサートとなりました。

7月・ロバート・コウエイロ教授(声楽家、ミラノ市立音楽大学)
エリア・タリアヴィーア氏(ピアニスト、ミラノ市立音楽大学)



〈上〉マティアス・ブッフホルツ教授による公開レッスン
〈右下〉グラハム・エラード教授とステイーブ・ジョンストン教授を囲んでの対談の様子
〈左下〉ロベルト・コウエイロ教授とエリア・タリアヴィーア氏による公開レッスン

ミラノ市立音楽大学からお二人をお迎えし、声楽専攻を中心に様々なプログラムを行いました。特に公開レッスンでは大変熱心なご指導で、学生も応えるように素晴らしい歌声を披露しました。滞在中にお誕生日を迎えたコウエイロ先生に学生達がパーティーを開くというサプライズもありました。

11月・グラハム・エラード教授(映像作家、ロンドン芸術大学 セントラルセントマーティンズ)
ステイーブ・ジョンストン教授(映像作家、ロンドン大学 ゴールドスミス)

映像作家であるお二人は、昨年度も「あいちトリエンナーレ」瀬戸内国際芸術祭」関連事業でご来学。今回の1ヶ月間の滞在期間中には、本学の美しいキャンパスを映像作品におさめ、それに学生達が関わるといふ貴重な事業を実施することができました。

2月・アクセル・ルーフ教授(作曲家、シントワルト音楽大学)
作曲専攻がお迎えし、作曲専攻のマスターコース、本学音楽堂でのコンサートを実施しました。ルーフ教授は日本との関わりも深く、学生にとって得るものが多い事業となりました。

今後も多様なアーティストを招き、大学学生にとって、また地域の芸術振興にとつて有意義な事業を提供していきます。

美術学部

専攻	氏名	学年	名称	受賞名	
日本画	田尻 彩花	学部 3年	全国美術大学奨学日本画展2014	奨励賞	
	玉井 伸弥	学部 3年	ギャラリーへ行こう2014	入選	
	飯田 穂野香	学部 3年	全国美術大学奨学日本画展2014 愛知芸大公募作品展	奨励賞 教授賞	
	田口 由花	学部 4年	損保ジャパン日本興亜美術賞 FACE2015	入選	
	鈴木 広太	博前 1年	第69回春の院展・99回再興院展	入選	
	鈴木 靖代	博前 1年	第99回再興院展	入選	
			碧い岩見の芸術祭	入選	
			第9回CBC翔け!二十歳の記憶展	入選	
	河本 真里	博前 1年	第69回春の院展・第99回再興院展	入選	
	鈴木 靖代	博前 1年	第69回春の院展・第99回再興院展	入選	
安田 拓矢	博前 1年	第99回再興院展	入選		
川島 優	博前 2年	損保ジャパン美術賞fase2014 星野真吾賞	オーディエンス賞 優秀賞		
		第99回再興院展	奨励賞		
	今井 美圭	博前 2年	第69回春の院展	入選	
	平田 望	博前 2年	第69回春の院展・第99回再興院展	入選	
	菊池 望	博前 2年	第69回春の院展	入選	
	齋藤 晴香	博前 2年	第69回春の院展・第99回再興院展	入選	
	宇城 翔子	博後 1年	第69回春の院展	入選	
	森下 麻子	博後 3年	第69回春の院展・第99回再興院展	入選	
油画	鶴岡 聡子	博前 1年	第9回CBC翔け!二十歳の記憶展	愛知教育委員会賞	
	大山 紗智子	博前 1年	トーキョーワンダーウォール公募2014 清須市第8回はるび絵画トリエンナーレ	入選 優秀賞	
	箱山 朋実	博前 1年	第39回全国大学版画展	收藏賞受賞	
	横山 奈美	2012 修了	現代美術の展望「VOCA展2015 -新しい平面の作家たち」	推薦出品	
	荒井 理行	2011 修了	現代美術の展望「VOCA展2014 -新しい平面の作家たち」	推薦出品	
	福山 竜助	2008 修了	京都府美術工芸新鋭展	産経新聞社賞	
	鋤柄 ふくみ	2007 修了	現代美術の展望「VOCA展2015 -新しい平面の作家たち」	推薦出品	
	彫刻	住田 衣里	博前 2年	Tokyo Midtown Award 2014 アートコンペ部門	優秀賞
		吉田 達彦	博前 2年	第8回飾り瓦コンクール	碧南市長賞・中日新聞社賞
		中村 恵	博後 2年	第8回飾り瓦コンクール オブジェ・エクステリア部門	優秀賞
			平成26年度 日本弁理士協会 会長賞	入選	
デザイン	田中 祐希	学部 3年	平成25年度デザインパテントコンテスト	入選	
	田中 厚美	博前 2年	三重かさねプロジェクト 2014年日本デザイン学会 第61回春季研究発表大会口頭発表		
	宮川 友子	博前 2年	「工場の思い出」プロジェクト 2014年日本デザイン学会 第61回春季研究発表大会ポスター発表		
			西尾市映画「オシニ」監督	入選	
陶磁	柄澤 あかり	博前 1年	第45回東海伝統工芸展	入選	
	明石 朋実	博前 2年	第45回東海伝統工芸展	入選	
	酒井 里奈	博前 2年	第45回東海伝統工芸展	入選	
	野中 雅博	博前 2年	第45回東海伝統工芸展	入選	
	齋 期天	博後 3年	第45回東海伝統工芸展	NHK名古屋放送局長賞	
	森本 静花	2013 修了	第45回東海伝統工芸展	入選	
	屋我 優人	2013 修了	第45回東海伝統工芸展	入選	
	金 峻永	2008 修了	国際陶磁器コンペティション 第10回国際陶磁器展美濃	陶磁器デザイン部門銀賞	

音楽学部

専攻・コース	氏名	学年	名称	受賞名
作曲	羽鳥 沙也夏	学部 3年	第16回TIAA全日本作曲家コンクール 室内楽部門 第2回ウェブ・サウンド・ クリエイター・コンテスト	3位入賞 (1位、2位なし) 入選 (ファイナリスト)
	西野 淳	1990 卒業	第21回読売演劇大賞	スタッフ賞ノミネート
音楽学	深堀 彩香	博後 2年	比較文明学会機関誌『比較文明』に論文掲載 日本学術振興会特別研究員DC2採用	
	七條 めぐみ	博後 3年	日本学術振興会特別研究員DC2採用	
	森本 頼子	博後 3年	日本音楽学会機関誌『音楽学』に論文掲載 広島芸術学会機関誌『藝術研究』に論文掲載	
声楽	小林 円	学部 4年	第11回東京声楽コンクール	第2位(1位なし)
	小林 美咲	学部 4年	第20回みえ音楽コンクール 声楽部門 大学生・大学院生の部	第1位・三重県知事賞
	井口 侑奏	博前 1年	徳島音楽コンクール 第68回全日本学生音楽コンクール 名古屋大会 声楽部門 大学の部	銀賞 第2位
	水野 優	博前 1年	第15回 大阪国際音楽コンクール 声楽部門 age-u	アブニール賞
	大梅 慶子	博前 2年	第68回全日本学生音楽コンクール 名古屋大会 声楽部門 大学の部	第2位
	山際 きみ佳	博前 2年	第68回全日本学生音楽コンクール 名古屋大会 声楽部門 大学の部 第68回全日本学生音楽コンクール 声楽部門 大学の部	第1位 入選
	水野 秀樹	2012 修了	第44回イタリア声楽 コンクール シエナ部門	金賞
	谷本 尚隆	2011 卒業	第15回大阪国際音楽コンクール 声楽部門 Age-G	エスポワール賞
ピアノ	高島 美穂	学部 4年	第8回横浜国際音楽コンクール ピアノ部門 一般Aの部	第3位
	酒井 黎子	博前 2年	中部シヨパンコンクール	金賞・中日賞
	有田 麻佑子	2013 卒業	第23回 G.カンボキアーロ国際 ピアノコンクール(イタリア・ベダーラ) 第23回 G.カンボキアーロ国際 ピアノコンクール(イタリア・ベダーラ)	ソロ部門 (カテゴリE) 第1位 室内楽部門(ヴァイオリンデュオ) 第1位
弦楽器	関口 林音	学部 2年	第2回いかるがコンクール弦楽器部門	第3位
	太田 咲耶	学部 3年	2014年第15回大阪国際音楽 コンクール 弦楽器部門「ハーブ」	第3位
	岩田 優里愛	学部 3年	第20回みえ音楽コンクール 弦楽器部門大学生以上一般の部	第1位・ 岡田文化財団賞
	山田 沙織	博前 1年	第16回日本演奏家コンクール 弦楽器一般Aの部	第3位
管打楽器	吉田 奈央	学部 2年	第6回岐阜国際音楽コンクール 管楽器部門専門コース大学の部	第3位
	潟上 源太郎	学部 2年	第11回関西トロンボーン協会 ワークショップコンクール 成人ソロ部分	第3位
	平光 優里	学部 4年	第6回岐阜国際音楽祭打楽器部門 第31回日本管打楽器コンクール マリンバ部門	第3位・ 審査員特別賞・ 文化人特別賞 入選
	高田 瑠奈	博前 1年	第11回いちのみや音楽コンクール	第3位
	橋本 南海	博前 1年	岐阜国際コンクール2014年度 管楽器一般の部	第3位

受賞者の声



美術研究科博士前期課程日本画領域2年

川島 優 かわしま・ゆう

私は普段の制作では、「無機質な空間」をテーマとしています。

幼少時代に緑豊かな土地に住んでいたからかもしれませんが、無機質な、洗練された物や場所に得体の知れない嫌悪感を抱く時期がありました。しかし、時が経つにつれて嫌悪感は慣れに変わり自らそういった場所に身を置くようになったのです。それはある種の現代社会に順応もしくは汚染されてしまったからかもしれません。「無機質な空間」は、今日という時代を生きている上で見えてきた自身のテーマだと考えています。これまでの受賞にあたり、多くの関係者また知人より様々な叱咤・激励をいただきました。より一層の励みとして自身の表現を高めていきたいです。今後、この賞に恥じぬような制作活動を続けていきたいです。



Deja vu
第99回再興院展 奨励賞



Toxic
損保ジャパン美術賞fase2014
オーディエンス賞



Inside
星野真吾賞 優秀賞